

ニガウリ（抑制）

	7	8	9	10	11
作 型	◇ (#)※ ◇ ○ ~~~~~ ◎ _____ ////////////////				
主な作業	植催播 鉢 付芽種 上 準備 げ	定摘 整 誘交 植芯 枝 引配	収 穫		内 張 被 覆

ニガウリ ウリ科、原産地：熱帯アジア地域

作物名 ニガウリ

学 名 Momordica charantia L

作 型 ハウス抑制栽培

技 術 体 系

1 作型の特徴

熊本県内ではスイカ後作としてのハウス早熟栽培が営利栽培として定着している。抑制栽培は秋メロンに変わる品目として、現地でも一部実践されている。

【抑制栽培】

単棟ハウスを使用し、盛夏期に育苗や定植を行い、価格が上向く9月頃から出荷する。定植後は高温となり茎葉が焼けることがあるため、遮光等により気温の低下に努めることが必要である。収穫後期の低温期になると収穫まで日数が長くなり品質が劣るため、半促成栽培より収穫期間は短くなりやすい。低温時期にはカーテン等で保温することにより収穫期間を延ばすことが出来る。

2 適応地域

平坦地域

3 栽培条件

(1) 温度

発芽適温 28～30℃、生育適温 20～30℃程度、最低限界の15℃以下では、著しく生育不良となる。35℃以上の高温では、花粉の稔性が低下し

着果しても変形果の発生が多くなる。

(2) 光

茎葉が繁茂しやすく、過繁茂となると着色不良等が発生し品質が低下する。

(3) 土壌条件

収穫期間が長いいため、堆きゅう肥を施用し、できるだけ深耕して根張りを良くすることが多収穫の条件となる。また、強酸性の土地を嫌うため、石灰資材を施用してpH6.5目標に調整する。

4 施設装備

- (1) 育苗ハウス
- (2) 単棟ハウス
- (3) 誘引用の支柱

5 経営目標

- (1) 収量 3.5 t/10a
- (2) 投下労働時間 300時間/10a
- (3) 所得率 50%
- (4) 経営規模 20a
(家族労働力2人の場合)

栽 培 技 術

1 品種と特徴

果形と果皮色から品種が区分されている。青中長、青長、白中長、白長などがある。淡緑色のものもある。

白色品種も市販されているが、市場で取引されるものは、ほとんど緑色品種となっている。

「熊研B P 1号」

熊本県育成青中長系F₁品種。雌花着生率が高く、果皮色は濃緑色でいぼは低く丸い。果形はやや短い。

「えらぶ」

市販されている青中長系品種の中で最も一般的な品種。果皮色は鮮やかな濃緑色。いぼはやや高く尖る。

2 育苗

(1) 育苗ハウス

高温期の播種となるため、被覆資材等を利用してハウス内の温度低下に努める。

(2) 播種

種子はペンチで軽く割り、育苗箱に5～6cm間隔で播種し子葉が開く頃に鉢上げする。播種前に25～30℃の温湯に4～5時間浸漬すると発芽が揃いやすい。

播種量は栽植様式により異なるが、10a当たり450～700粒程度が必要である。

(3) 育苗管理

鉢上げには9cm程度の小さめのポットがよい。ハウス内では地面から離して育苗するなど、培地温の低下に努める。

(4) 育苗日数

播種後20～25日程度で、本葉4～5枚の苗を定植する。

3 本圃準備

育苗期間が短いので、準備は早めに行う。また、高温期の定植となるため、地温の上昇を抑えるためにマルチは白黒ダブルマルチを使用する。

(1) 施肥

堆肥を必ず施用し、地力を高めておくとともに、酸性土壌では生育が悪いので、pH6.5を目標に苦土石灰を施用しておく。

施肥量			(前作なしの場合 Kg/10a)	
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	その他肥料
基肥	20	20	20	堆肥 2 t
追肥	10	5	10	苦土石灰 150 Kg
合計	30	25	30	追肥開始は着果始め頃から

追肥は、着果始め頃から施用する。草勢が弱ると品質や収量が著しく低下するので、生育状況によっては追肥回数を調節する。

(2) 栽植密度

栽 植 様 式

	畝幅	株間	10 a 株数	子づる本数
内張利用	250cm	100cm	400株	3本仕立て
斜め誘引	250cm	60cm	666株	2本仕立て

4 定植

苗の草勢が弱い時は定植前に液肥を施用しておく。本葉4～5枚の頃に定植する。生育適温は昼温25～30℃、夜温18～20℃なので、気温が高すぎる場合は遮光等により気温低下に努める。また、定植から夜温が下がる頃までビニルを被覆せずに露地状態とすることも気温の上昇抑制には有効である。

5 定植後から開花までの管理

活着するまでは灌水に努め、活着後の本葉5～6枚頃に親づるを摘心し、子づる2～3本仕立てとする。

孫づるは全て摘除し、子づるのみを誘引する。

6 開花期の管理

定植後30日以降からの雌花に着果させ、着果後2週間程度で収穫となる。

抑制栽培の開花初期には訪花昆虫による自然着果が多くなるため、摘果により着果数を制限することが順調な果実肥大や草勢を維持するために必要である。

着果後は果実肥大を促すため、灌水量をやや多くする。この頃から追肥を行い、草勢を見ながら適度の間隔で追肥を続ける。

着果期以降には果実の着色を促進するために誘引を開始する必要がある。

目標着果数は5節あたりに一果を目安とし、草勢に応じて増減させる。

7 病虫害防除

(1) センチュウ

ニガウリはネコブセンチュウが寄生しやすく、連作すると被害が著しいので、土壌消毒または殺センチュウ剤の土壌施薬を行う。

(2) つる割病

連作ほ場では特に注意する。発生が見られるほ場では「新土佐」台木に接ぎ木する。

(3) うどんこ病

窒素肥料過剰で過繁茂となると発生しやすい。黄色の円形の斑点を生じ、白粉状のカビが発生する。次第に葉全体に拡大して黄化し枯れ上がる。

密植や過剰施肥を避け、整枝して通風を良くする。

(4) 害虫は、夜蛾類、アブラムシ、アザミウマ類に注意する。

8 収穫

収穫適期は温度により変わるが、開花から2週間～25日後には収穫となる。ニガウリは未熟果を利用するもので、果皮や種衣が着色した熟果は商品として出荷できないので、熟果が発生しやすい高温期には特に収穫遅れ注意する。

収穫果のサイズは品種によって異なるが、長さ23～30cm、直径5cm程度の250～300gの青果実とし、果形や長さを揃えて箱詰出荷する。

選別の際はニガウリのイボを傷つけないように注意して取り扱う。箱の下や上段と下段の間に緩衝材を使用するといぼの折れやつぶれが少ない。